

JLT300 日本の学校教育

3年 3,4クォーター

担当教員	寺岡 英男
授業形態	講義
アクティブ・ラーニング	アクティブ・ラーニング科目
単位数	2
曜日・時限	火曜日・4時限

授業概要

日本の学校教育は、カリキュラムと教授・学習（授業）を主な領域とするが、ここではこれらに近年展開されている教師教育を加え論じる。カリキュラムでは、その改革の世界的動向とその背景や日本での歴史について、授業研究では、特に日本の民間教育研究団体の実践も含めた授業研究の実際を紹介するとともに、関連して学力問題についても言及する。教師教育では、カリキュラムや授業の実践の転換と結びついて、教師教育の中核的理念になってきている「省察的实践家」とその専門性教育の実践を教職大学院の取組みを事例に考察する。

到達目標

学生は、

- (1) 今日の世界のカリキュラム改革の動向を理解する
- (2) 日本の教育課程の変遷の歴史を学ぶ
- (3) 授業研究の実際について実践記録を読みながら調べる
- (4) 関連して、学力の問題について、最近の学力観について、PISAなどの動向や学力評価法の動向なども含めて調べる
- (5) 以上のようなカリキュラムや授業とその改革の担い手である教師の専門性について学ぶ。
- (6) 教師の専門的な力量の形成と同僚性にもとづく学校づくりの実際を教職大学院の取組み事例を通して学ぶ。

先修科目

特になし

教科書・参考資料等

- (1) J. デューイ『学校と社会』講談社学術文庫（1998）
- (2) OEDC/PISA2012 調査報告書5『生きるための知識と技能』ぎょうせい（2013）
- (3) 大桃敏行他『教育改革の国際比較』ミネルヴァ書房（2007）
- (a) J. ブルーナー『教育という文化』岩波書店（2004）
- (b) 日本教育方法学会編『教育方法研究ハンドブック』学文社（2014）
- (c) 板倉聖宣『科学の形成と論理』季節社（1973）
- (d) 銀林浩『子どもはどこでつまづくか』国土社（1972）
- (e) 長野県伊那小学校『共に学び共に生きる』信州教育出版社（2012）
- (f) D. A. ショーン『省察的实践者とは何か』鳳書房（2007）

授業の方法

この授業は担当教員の講義形式が進めが、内容によって、自分たちで調べたり、グループ討論等のアクティブ・ラーニングを行うことも取り入れる。

成績評価

レスポンスペーパー（RP）：

学生は、授業の節ごとに、その内容についての意見を書くような、小レポート（A4で1-2枚程度）の提出が求められる

分析ペーパー（AP）：

講義内容について、各自の関心ある内容についての分析をまとめた数頁の分析レポートを授業の終盤で提出する。分析レポートの内容は、授業を通してディスカッションを行った資料や考え方に対する批評、ある課題に対するまとめや観点の提供、また1つの課題に焦点を当て深く掘り下げる等である。学生は1人1人が自身のペーパーについてプレゼンテーションを行う。

成績

- 40% レスポンスペーパー (RP)
- 60% 分析ペーパー (AP)

授業スケジュール

第1回： 世界のカリキュラム改革の動向—米国の場合—

授業概要についてのオリエンテーション。世界のカリキュラムの改革動向について、米国のこの間の改革の取組みについて、その背景とねらい、そして内容について考察する。

第2回： 世界のカリキュラム改革の動向—他の諸国の場合—

引き続き他の国々のカリキュラムの改革動向について学ぶ。具体的には、イギリス、フィンランド、アジア等を取り上げ、その内容と比較を行う。

第3回： 日本の教育課程の変遷

日本の教育課程の変遷について、特に戦後から今日に至るまでの内容とその特徴を調べる。

第4回： 日本の授業研究（教科研究）

日本の授業研究の実際を、戦後の授業研究に大きく貢献した民間教育団体の、仮説実験授業、数学教育協議会の事例を取り上げる。

第5回： 日本の授業研究（教科研究）その2

前回で紹介した日本の民間教育研究団体の教科研究と実践の意味を検討する。

第6回： 日本の授業研究（総合学習等）

先週の授業研究の事例が教科教育研究の優れた例であったのに対して、ここでは長野県伊那小学校の総合学習の取組みを取り上げながら、その持つ意味、教師の世代が変わっても継承・発展させられている組織的な根拠等について考察する。

第7回： リテラシー、学習観の転換

知識基盤社会の成立の中で、これまでのリテラシーの解体と再構築、それと関わった学習観の転換が求められている。そうした中で、これから求められるリテラシーとはなにか、そのためにカリキュラムや授業をどう改革していくべきかについて、考察する。

第8回： OECD/PISA の考察

前週で考察したリテラシー、学習観、授業の転換に大きな契機を与えた OECD/PISA 調査とその分析を具体例に、考察を深める。

第9回： 学力と評価研究の新しい動向

これまでに見てきたいくつかのレベルの転換は、関連して学力の見直しと、それにふさわしい評価のあり方と言う問題を提起する。この週では、北米を中心にした評価方法の研究動向について考察する。併せて、日本のそれとを比較し、日本の問題点を批判的に考察する。

第10回： 小括

これまでの授業で取り上げた内容について各自小括を行い、それについての交流を小グループの中で行い、考察を深める。

第11回： 改革の主体としての教師

これまで見てきたリテラシーの転換、学習観、授業の転換を踏まえて、学校の中でカリキュラム、授業改革に取り組んで行く主体は教師であり、学校の中での教師の同僚性組織である。この問題について考察する。

第12回： 学校改革を教師が協働で取り組む実践事例

前週に取り上げた教師が主体になって学校の中で改革を協働で進めている事例のいくつかについて調べ、考察する。

第13回： 教職大学院の拠点校の訪問と分析

引き続き実践事例を読み、考察を深める。また、教職大学院の拠点校を訪問し、学校の参観とインタビューを行い、それをまとめる。

第14回： 教師の専門性の考察

以上のような改革の取組み事例を踏まえて、教師の専門性のあり方について、D.A. ショーンの Reflective Practitioner の文献を読み、考察を深める。また学習したことをまとめ、プレゼンテーションの準備を行う。

第15回： プレゼンテーションと相互交流

学習したことのプレゼンテーションと相互交流を行う。

事前・事後学習

- ① 授業の項目は教科書・参考資料等にあげた項目に対応している。講義聴講の前に、対応する項目を一読すること(予習)。
- ② 講義聴講の後に、講義された内容・配布資料と共に対応する教科書・参考資料等の項目について理解を深めること(復習)。